富山藩士野崎雅明が文化12年(1815)に著した『肯構泉達録』という歴史書がある。私の祖父が活字本(野崎雅明著・富山県郷土史会校注、1974、『肯構泉達録：越中国取りの記』富山：KNB興産)の出版に関わっていたため幼少時よりその書名に馴染んでいた本である(実際手に取って目を通したのは40歳を過ぎてからであるが)。源平以降戦国時代までの越中における合戦の記述が中心であるが、江戸時代については富山藩で起こった大事件の記述も含まれている。そのなかに藩士の男色をめぐる殺傷沙汰が一件記録されている(368-372頁)。

。

私は日本史研究者でもないしジェンダー史や性愛史を手掛けているわけでもないのであるが、同性愛・同性婚についての議論が喧しい昨今、この問題を歴史的に考えてみたい人にとっていささかなりとも益するところのある興味深い情報なのではないかと思い、ここに紹介しておくにした。もしかすると、専門家のなかではよく知られた資料なのかもしれないが、そうでない人にはあまり知られていないであろうから、専門家の役には立たなくても、そうでない人で江戸時代の男色について実証的な知識を得たい人の役に少しは立つのではないかと思う。

素人ながら面白いと思ったことを挙げておく。

- ・17世紀中葉の富山の武士に男色関係が見られた。
- ・それは藩に禁じられていた。
- ・秘密の事ではあったが、風聞が広がった。
- ・しかし、同僚には黙認してもよいと考える者もいた。
- ・そうはいかないと考える者もいたため、藩に報告がなされたが、藩側でも処罰はしない方針となった。当時の富山藩をめぐる特殊な事情が挙げられているが、積極的に取り締まる気はそもそもなかったようにも見受けられる。
- ・しかし、藩や殿様への報告により面目を失ったと考えた男色当事者は、藩に報告した同僚に復讐し惨殺した。
- ・藩は双方を和解させようとしていた。
- ・男色当事者の母親や家中の者は、男色当事者の復讐に協力し殉死した。男色を忌避した気配はない。

以下、当該記事を引用しておく。

梶原左内・橋本主殿兩人、御小姓にて嬖幸ありけるが、漸やく成長し、各二十才に及びける。その頃、速水助之丞といふ美少年召し抱へらる。然るに梶原、速水と男色にて、互ひに親しく、この頃、橋本主殿は御目付役を勤む。また上田市之丞、初め梶原召仕へ候ふ者にて、取り立て御上に仕へしめ、後、立身して御徒となり、小姓目付役なり。

明暦三年二月中旬、梶原・速水しばしば忍び逢ひけるが、世上に風聞しければ、上田思ふに、「我れ梶原に思ありといへども、役儀の重ければ、この事言上すべきは当務なり、いかがせん」と案じ煩らひ、或る時、橋本主殿に談じけるが、主殿申しけるは「汝は梶原が取り立てなり。我も梶原と同じく仕へし者なれば、左内が難儀とならん事を愁ふ。言上は無用」と止めける。その後、市之丞思ふは「主殿申すも理なりといへども、役儀なれば、上聞に達せざるは同罪たるべし」と、頓て書き付けを以って申し上げける。然るに、御上、御思し召しもありけるや、何の御沙汰もなし。

その内、橋本主殿より兩人の事を御聴に達しけるよし風聞せり。然るに、梶原・速水も、何となく御前疎々しくなりければ、兩人推量せるは、主殿の言上に疑ひなしと。それより兩人、主殿を恨みけり。

この事、主殿は夢にも知らず。我を悪むはあるましき事と思ひ、兩人これまでの不義猶予すべき事にあらずと、すなはち書付けを以って御聴に達しける。

御上、時に梶原左内を御呼出だし、両目付の書付を左内に下され「汝不屈なれども、小松公より他国者を抱へる事御制禁あるを用ひず、今汝等を罪せば、聞えもいかがなれば、此度は赦すなり。以後を慎み申すべし」と仰せありければ、左内、ありがたく御請け申し上げ、御前を退出しけり。

梶原は母一人あり。いまだ妻子もなし。家に帰り、母に向ひ「橋本・上田兩人、我が事を言上しければ、兩人を殺し、自害仕るべくと思ひ候ふまま、母人は京都へ送り申すべく御用意なされ候へ」と申しければ、母聞きて「京都とは何事ぞ。我も助太刀し、その者共を打ち果し、一所に自害せんに何の苦勞あるべき。はやく事を謀り候へ」とありければ、左内申しけるは「御上御沙汰ありて、秋山志摩方にて廿九日には主殿と我と和順の振る廻ひといふ事にて招かる。その節、主殿を殺害いたすべし。それ前に家内の埒を付けん」と、召し仕ふ男女に衣類金銀を与へ下宿せしめ、「明日山・二上山・大岩等へ参詣せよ」と申しければ、皆よろこび下宿せり。

さて、廿九日にもなりければ、速水助之丞、左内家司上坂治右衛門・掃除坊主林清等と申し合せ、上田市之丞を呼びに遣はし、市之丞到りければ、菓子・酒などを出だし勧め、その上にて左内申しけるは「今度我等の事を言上しければ、その返報せん。覚悟せよ」といひもあへず、共に手取り足取り縄にて縛り、錐・小刀にて突き、槌にて打ち、鋸にて挽き、なぶり殺にし、面の皮を剥ぎ庭に投げ出し、さて左内は、昼時にもなりければ、母に暇乞ひし、秋山方へ行きけり。

速水、林清、治左(ママ)衛門等に跡の事を頼み置きければ「最早左内は秋山方へ行き着き申すべし。母人覚悟し給へ」とて小脇指を渡しければ、母、脇指をうけ取りて心もとを突

き貫き、速水助之丞とどめをさし、茶の間の炉に死骸を入れ、炭を盛り上げ、火を吹きおこし、扇ぎたて、大概死骸の焼けたる頃、「治右衛門は左内に案内せよ」といひければ、治右衛門、兩人暇乞ひして秋山方へ参りける。速水・林清兩人残り、「最早治右衛門は秋山方へ致り候はん。家に火を懸けん」と茅に火を付け、つまりつまりに燃やし付けければ、焰さかんに焼け上る。

秋山方にては、左内・主殿兩人を振り廻し、相伴に御徒大森五兵衛ありけるが、小歌の上手にて、一曲謡ひ、酒盛も酣になり、各酔を催し、兩人の宿意も打ち解けし躰に見えける所に、左内家司上坂治右衛門、左内に逢ひたきよしにて来たれば、左内立ち出づる。治右衛門潜かに「跡の始末は尔々」といひければ、左内「さあらば、家に火を懸け申すべし」と云ひて、座敷へ帰り、暫くして左内・主殿、露地へ出で遊歩せしが、左内云ふ「今度の一件、堪忍なりがたし」と。脇指を抜き打ち懸かる。主殿も「心得たり」と互ひに打ち合ひ、共に深手を負ひ、枕ちがひに倒れて死にけり。上坂治右衛門、表に在りてこれを聞き、飛び入る処を、秋山・大森兩人、治右衛門を捕へ、しまりする折から「火事ぞ」と騒げるなどに、打ち捨て、秋山は登城しけるに、梶原が宅のよし、人多く馳せ寄る。

秋山行きてみれば、門を開、庭中に酒樽二つならべ、杓を立て、速水は鎗、林清は長刀にて、門に入る者を上下を嫌はず、突き伏せ、薙ぎ倒し、酒を酌んで息をつき、また来る人を突き落し薙ぎ伏せ、死人九人、手負十二人とぞ聞えける。富田右衛門尉給人、馬上より突きおとさる。御徒松井清右衛門も討たれけり。火も鎮まり、人も来らず。速水と林清さしちがへ果てたり。

御吟味ありて林清が一族六七人御成敗。左内は知行五百五十石、主殿は六百石、速水は二百五十石なり。これ明暦三年三月廿九日の事なり。